

## 子どもの遊びと幼稚園空間の関連性

## ～「場」を手がかりにして～

○高橋 陽子 宮里 暁美 吉岡 晶子 伊集院 理子 上坂元 絵里 佐藤 寛子  
小川 知子 川辺 尚子 石川 綾子 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

## I. はじめに

平成20年より「環境に対する豊かな感受性を育む」というテーマで、園庭の自然環境や豊かな感受性について、実践を通して研究をすすめた。

入園した子どもたちが、幼稚園は安心して自分を出していいところだと思えるようになり、仲間と共に自分らしく遊べるようになっていくには、どのような過程をたどっていくのであろうか。丁寧に事例検討を進めていく中で、幼稚園の中に存在している空間(以下、幼稚園空間とする)と子どもの遊びや自己発揮は深く関連していることが見えてきた。

幼稚園空間を、入園して最初に出会う「保育室」、その保育室を拠点に一步踏み出したところにある「保育室ととなりあう空間」、園の生活のさまざまな体験の中で出あっていく「その先の空間」という大きく3つに分けて考える中で、子どもたちが関わることで、それぞれの空間は生き生きと動き出し、誰も存在していない時の空間とは違う意味をもってくるという考えにいたった。

私たちは、子どもたちが関わることで動き始めた空間を「場」と捉え、子どもの遊びと幼稚園空間の関連性について「場」を手がかりに省察する。

## II. それぞれの空間における遊びの事例

30ほどの事例を集めて省察をしてきたが、ここでは、教例に絞って事例の概略を紹介する。

## &lt;保育室&gt;

本園では、3、4歳児は、登園時に保護者と一緒に保育室に来る。玄関から保育室への移動は、家庭の時間から園の時間へと移り変わる時間でもある。入園間もない子どもたちは、不安で押しつぶされそうな表情で保育室に入り、教師に身を寄せたり、不安な気持ちを和らげてくれる場所に座ったりして、保育室内の様子を見ている。そしてやがてそれぞれの思いで動き出す。

**縁台を選ぶ** 3歳入園で不安の強かったA子は、送ってきた母親が戻って行った廊下側の扉、保育室内の様子、そして扉越しに園庭が見える場所である縁台(保育室の壁際の25センチほどの高さの細長い台)の端を自分の居場所に定め、腰をおろして教師や友達の動きをじっと見ていた。見ているうちに表情が柔らかくなり遊び出すようになっていった。

別の日、縁台は、歌ったり踊ったりするショーの舞台となった。床よりほんの少し高い台に登るだけで、自分が大きくなったように感じるとともに、横並びで一緒に遊んでいる友達を身近に感じることができ、それまで見せたことがないような楽しい表情、伸びやかな体で歌と踊りを楽しんだ。

## &lt;保育室ととなりあう空間&gt;

子どもたちは、やがて安定の基盤である保育室から、廊下や隣の保育室、保育室と園庭の間に位置するたたき(園舎と園庭の間にあるコンクリート敷きのところ)など保育室ととなりあう空間に向かい遊びを展開する。

**保育室からたたきにつながる電車あそび** 3歳男児数名が毎日木製レールをつなぎ電車を走らせていた。外にもつな

げていきたい様子が見られた。教師は敷居を越えて外になげられるように、細長い紙とテープを用意した。子どもたちは、園舎に沿って長くのびるたたきに紙の線路をつなげていった。一人が紙をつなぎ、一人が電車を動かす。黙々と付けたし少しずつ延びていく線路を電車は少しずつ進んでいった。片付けになると、電車は紙の線路を保育室まで戻っていった。

## &lt;「その先」の空間&gt;

コート室、アトリエ、遊戯室、保健室などは、広さや出入り口の数や形状、天井の高さ、明るさなど、独自の雰囲気をもつ空間である。

**コート室でドミノ倒し** コート室で、年長児J夫は一人黙々と小さな積み木を美しく緻密にピラミッド状に積み上げていた。J夫が作っているものは見事で、廊下に面した開口部が広いコート室の傍を通りかかった誰もが思わず立ち止まって歓声をあげた。その後、人通りも少なくなり、静かになった部屋で、J夫は一人集中して、稜線に積み木を立てて置く作業を続けた。

**遊戯室でスケートショー** 年長女児数人で遊戯室ほぼいっばいの広さにBブロックで囲いを作り、スケートリンクに見立て、ショーを始めた。遊戯室は、天井も高く、式や誕生会などハレの日に使われる場所であり、その空間を生かして、子どもたちはスケート会場の雰囲気を次々作り上げていった。音楽をかけ、カーテンを閉めて暗くして、スポットライトでスケーターを浮かび上げらせ、階段状の観客席まで設けた。ライト係、カメラマン、観客、スケーター、その役になりきり、遊びの世界に浸っていった。

## III. 省察

幼稚園で子どもたちが主体的に過ごしていくようになるには、まず、保育室が自分の居場所、安心できる生活の場として位置付けていくことが必要である。教師との信頼関係を基盤に、安心出来る場所やお気に入りのものを媒介にしたり、ともに過ごす友達の存在に気づき楽しくなったりして、保育室は子どもたちの生活の場になっていく。いろいろな空間が子どもたちにとって意味をもつ場になっていく大前提が各々の保育室にあること、時間をかけながら各々の方法で保育室を自分の居場所として受け止めていく過程が重要なのだと考える。

保育室が安心できる居場所になると、行ったりきたりしながら、行った先に落ち着ける場所や安心して過ごせる場所を見つけて留まって遊ぶようになって、遊びの場が保育室ととなりあう空間まで広がっていく。往還する(行き来する)行為、循環する(ぐるっと回って戻る)行為は遊びの場を広げる上で大事な意味をもっている。

子どもたちは自分からいろいろな空間に向かい、その空間に身を置くことで、その空間のもつ特徴を感じ取り、時々思いや遊びにあわせてじっくり空間を選んで過ごしたり、遊びにより適した空間を能動的に創りだしたりしているのだと考える。子どもたちが園の暮らしの主体者になっていく上で、自分たちが選んだ場で思う存分遊びこめること、空間の特徴を生かしながら遊びの場を自分たちにとってより意味のあるものに創りだしていくことを保障することがとても大事だと考える。